

JTU きょうと教組

日本教職員組合

NEWS LETTER

2018年7月15日発行 No.94
 京都府教職員組合 小鍛治 啓
 Kyoto School Staff Union
 Tel: 075-252-6771
 Fax: 075-252-6772
 http://kyoto-union.net



白熱議論で定期大会は成功！

“やっぱり、言わないと始まらない”



きょうと教組は6月23日、第29回定期大会を開催しました。

冒頭あいさつで小鍛治委員長は、「今日は、沖縄慰霊の日でもある。2度と戦争をしてはならない、安倍改憲を絶対に許してはならないという思いを今かみしめている。」と述べました。続いて、「今年度末の3月31日、やっと『空白の1日』がなくなる。永年の運動の成果が実を

結ぶことは、非常に喜ばしい。2020年の地公法等改正の施行に向けて、臨時・非常勤教職員の労働条件の更なる改善のために引き続き努力していきたい。長時間労働の是正が大きなテーマの一つであるが、実際に業務削減にはつながっていないのが現場の状況である。本日の大会の中で、ぜひ現場の声を上げていただき、それを形にできるようにしていきたい。青年層をはじめ組合加入者を迎えることができ、退職者が毎年ある中、組合員数を維持することができる。先を見通して更なる発展を遂げていくため、教職員が働き続けることができる環境づくりも喫緊の課題である」と、大会の意義、きょうと教組の活動の意義を訴えかけました。

来賓として高橋直樹（自治労京都府本部執行委員長・連合京都副会長）さん、今道雄三（自治労京都府職員労働組合執行委員長）さん、平井としき（京都府議会議員）さん、鈴木マサホ（京都市議会議員）さん、保科充孝（日教組中央執行委員青年部長）さん、畑田尚彦（教職員共済事務局長）さん、みずおか俊一（日政連参議院予定候補）さんのみなさんから激励やメッセージをいただきました。

第1号～第5号議案まで、討論をへて執行部提案はすべて承認されました。

大会での議論

現場の声こそ「改革」具体化への一歩



- *働き方改革のかけ声の中、仕事量は減るところか増えている。教育委員会内でも、具体的な方策を見出せずにいるようである。
- *若い人が心配だ。「気にかかる職員」が増えている。当局はそういう人を増やしているという事実を認識することが必要だ。
- *現場でしんどくなる若い人が増えている。休職や退職に至る例もある。が、周りもしんどい状況の中、そんな若い人をなかなかフォローできていない。
- *「放射能汚染」の問題については、常に意識しておきたい。見えなくされている事実（問題）、今後予想される問題もある。
- *現在、学校司書として2校に勤務している。明日にもやめることになるかというような非常に不安定な状態である。勤務校により待遇が違い、戸惑うことも多い。加えて、司書どうしの横のつながりができにくい勤務状況である。
- *現業職員の立場から見ていて疑問に感じることもある。早朝6時半以前に出勤している若い教員、それを当たり前のように受け止める職場の教職員、体調不良で早退する教員……。これでいいのか。生徒たちへの指導に対して、「もっと厳しく！指導ができてない！」と要求する管理職がいるが、理解できない。
- *長時間働いているほうが熱心だといった風潮があったが、超勤縮減に対する衛生委員会の取り組みの中、早く帰ろうとする雰囲気は少しできてきた。
- *一部、府立高校では、募集定員確保のため、「中学生の奪い合い」となっている。そんな中、受け入れた生徒への十分な対応、配慮のための「スタッフ不足」という状況が起きている。
- *外国人教育との関わりという点で、東九条マダンにきょうと教組が組織として関わっているという記述が必要ではないか。
- *道徳教育について。「教科への格上げ」と言うが、「格下げ」ではないか。道徳とは、教科の枠を超えて学校教育全体の中で不断に取り組みまれるという位置づけではなかったか。道徳の教科化が